

## 第1回 野洲市観光振興指針策定委員会 議事録要旨

●日 時

令和3年5月26日（水） 9：30～11：40

●場 所

野洲市役所 本館2階 第5会議室

●委 員 （全員出席 / 委員区分毎・50音順）

1号委員：田中 勝也委員長

2号委員：荒川 博行委員、井口 幸恵委員、川戸 良幸委員、北中 良幸委員、木村 靖副委員長、  
仲谷 禎紹委員、西田 秀孝委員、松沢 松治委員、吉川 文子委員、

3号委員：武内 了恵委員

●オブザーバー 奥本 晃士 滋賀県 商工観光労働部 観光振興局 観光企画室 主幹、  
進藤 武 野洲市教育委員会 文化財担当 次長

●事務局 栢木市長（途中からの出席）、環境経済部 西村次長、  
商工観光課 行俊課長、藤村専門員、吉山専門員、田中主任

●傍聴者 1名

1. 開 会

事務局（環境経済部次長）

2. 挨拶

環境経済部部長挨拶

3.自己紹介

各委員、オブザーバー、事務局の自己紹介

4. 委員長・副委員長の選任

委員長は田中委員に決定、副委員長は木村委員に決定。

5. 議 題

(1) 現行の「野洲市観光振興指針」5年目を迎えて（課題検証）

— 事務局より資料4・5に基づき説明 —

これまでの経緯としては、平成24年度に観光振興を含む「野洲市商工業振興指針」が策定され、その後、平成29年度に観光振興のみの指針となった。今年度5年目のため見直しを行う。今年度、第2次野洲市総合計画も定まっているのでその整合性も含めて検討する。

## 結 果

・委員の皆様活発に議論いただいた結果、次の方向で第2回策定委員会に向けて進める旨、ご意見をいただいた。

- ① 今後の野洲市観光振興指針の策定に向けて、全体の把握をするため、改めて野洲市の観光振興に係る課題を整理し直す。例えば、「1次観光」・「2次観光」・「3次観光」や「まちづくり観光」・「商業観光」、「歴史的な既存の観光」・「体験型等の新しい形の観光」、「地元主体の観光」・「大型観光施設関連の観光」等、何らかの 카테고リーに分けて整理し直し、野洲市が取り組むべき本当の課題を明確にする。
- ② 上記課題に基づき、どのような観光に対してどのように取り組んでいくのかを検討する。
- ③ 本日の各委員からの意見を踏まえて、委員長の協力のもと、事務局にて第2回策定委員会での検討材料を準備する。

## 主な意見・質問

### ◇野洲市観光振興指針の範囲等について

【委員】「観光入込客数」について、数値は間違いないと思うが、この数値のほとんどが滋賀県希望が丘文化公園、県立近江富士花緑公園、びわ湖鮎家の郷であり、ほとんどを占めている。野洲市の観光産業に直結する数値でないので、この数字だけに紛らわされないように注意が必要。

【委員】（兵主大社は）観光というよりも地域の氏神様という趣きが強い。コロナの影響は少なく、初詣客は兵主大社の場合は来客数等はほとんど前年度と変わらない。理由は外からではなく地元や近隣からの観光客が多いため。野洲市の観光を考えると、一般的な観光という認識とは少し視点を変えて、野洲市独自の特性を認識しながら検討すべき。

【委員】野洲市全体での観光振興を捉えた指針を策定すると思っていたが、検証するためには、まずはどちらにするか決めないといけない。まずは人に来てもらう必要があるので、滋賀県や市等の運営母体で分けるのではなく全体で捉えるべきと思う。

→【委員長】合意ではないが、指針を検討する時の考え方の一つとして、地元の観光と大型観光施設への観光とで分けて考えることも良いと思う。

【委員】滋賀県希望が丘文化公園や県立近江富士花緑公園には年間100万人程度集まる。そのことを資産として、次にどうつなげるかを考えるべき。そのためには市内の資源を磨き上げるべき。しかし、一つでは難しいのでいろいろなところと連携が必要。体験型はリピーターにつながり、お金も落ちる。観光の継続にはお金が地域に落ちる仕組みが大切。そして、大型観光施設も含めて市内の観光を改めて考える必要がある。それらを離すのではなく頭に入れながら考えていくべき。

【副委員長】希望が丘等を取り入れるか、もう少し整理して、多くの人が来られているという事実から観光振興指針にいかに関係付けるかが大切。

#### ◇野洲市延観光入込客数について（資料4）

【委員】令和2年の108万人の内訳についてについてはどのようなになっているか？

→【事務局】令和2年の108万人の内訳については、人数の多いところで令和元年と令和2年の比較で説明すると、滋賀県希望が丘文化公園は66万人から42万人に減少、県立近江富士花緑公園は29万人から27万人に減少しているものの減少幅が小さい。少人数単位で来られるため影響が少なかったと思われる。本調査での入込客数は滋賀県全域での各市町の決まった施設でのスポット調査であり定点観測。もう少し広げた形で議論できれば良いかと思う。

#### ◇近隣市町や県域での連携について

【委員】観光に関して、野洲市単独でPRするのはなかなか困難に思う。そのなかで、湖南エリアの一体として草津・栗東・守山・野洲として売り出すことは大切。今後野洲市の観光振興を考えたとき、近隣市町との連携は是非とも考えるべき。情報発信についても、野洲市が観光として近隣や県域（びわこビクターズビューロー）との連携のなかでどう活用するか検討が必要である。

#### ◇地元等での観光提供者の連携について

【委員】マイアミ浜オートキャンプ場に来られる方は8割程度が京阪神からが多い。宿泊時にフロントでどこに行こうかと相談される時、琵琶湖博物館や琵琶湖テラスなどが浮かぶ。しかし、市内で案内したいと思い、これまではびわ湖鮎家の郷や兵主大社、しじみ漁の船を出していただいたり、イベントの時は野菜を出していただいたりした。地元での連携は常々したいと思っていた。

【委員】コロナ禍を経験してからは今後、団体での客数は減るであろうということは、世間一般的にも観光業界でも言われている。個人の客を増やすには、いかにそこでしかできない、めずらしい体験ができるかということが大切。観光と食、農産物、アウトドア、健康などをつなぎ合わせて、観光に呼び込むことも必要。昨年度に実施したミニツアー（味噌づくりや近江牛レストラン、いちご狩り、兵主大社等の組み合わせ）等を参考に、単独ではなく離れているものを結びつけ野洲を周れるミニツアーを考えるのも一つ。また、湖南4市でどのように結び付けて、一泊していただいた上で、湖南4市をどのように周っていただけるか等を考えることにより、例えば、地元の農家との交流や体験を通じてもっと興味をもってもらえるかと思う。

【委員】都会から来られた方は田んぼにでも案内したら喜んでもらえる。秋は芋ほりなど連携してやったことがある。地元では価値が少ないものでも都会の人には魅力的であることがあるということ。

#### ◇観光振興指針策定の前提としての課題の整理について（観光振興に係るカテゴリー分類）

【委員】観光には1次観光、2次観光、3次観光としてそれぞれの特性で分類できる。一つのエリアからすると、1次観光は、地元が本当に呼び込みたい観光、2次観光は地元のなかで希望が丘等、他の要素で来られる観光、3次観光は野洲市以外に来られた観光客が野洲に寄られる観光。これから市として重点的に伸ばしていくべきなのはやはり1次観光。現在は商業観光となっていて、多くが利益を上げても市にお金が落ちない観光となっていて、「まちづくり観光」というものを大切にしていきたい。「野洲」には銅鐸以外何もない、と言われることが多い。しかし、何もないところでは暮らしが

成り立たない。暮らしが成り立っているということは何かがある。その辺をうまくクローズアップして観光振興を図ることで、暮らしの中に光るものを照らすということで地道に新しい観光資源をつくっていくためには大きな視点が必要。全てを一緒にしてしまうと、視点がぼけてしまうので、分類分けして議論する必要がある。

【委員】「1次観光～3次観光」や「まちづくり観光」と「商業観光」の 카테고리等に分けるなど、課題検証についても一度整理して本当の課題を明確にする必要がある。また、対象を市内市外、県内、県外等に分けたり、観光についての野洲市の光（宝）を明確にして進める必要がある。

→【委員】再度の課題検証は、入り口論として整理し、全体の把握として大切であり、最終、どれを取るかは改めて選択すればよい。

【委員長】 1.歴史的な資産を目当てにハイキング来られる一定の観光（歴史的な既存のもの）

2.体験型観光や地域の暮らしを活用して来ていただく観光（新しい形のもの）

この2つの観光は客層が違う。観光というサービス業としてそれぞれに異なるアプローチがある。しかし、全く別のものではなく、それぞれをどう結び付けるかなど、食と農、アウトドアと農、歴史と体験など。交通アクセスの課題についても、このようにいろいろな観光資産が結びつくことで一つの観光での負担が軽減されていくこともあるのではないかな。

#### ◇観光振興に係る課題について（交通アクセス等）

【委員】野洲市は観光として何もないという観念があるが、湖がある。何もなければ作らねば、という思いで家棟川にて最初は環境に特化して取り組んできた。そのうち、客を呼び込んで観光につなげていこうとなり、家棟川遊覧船となった。口で言うのは簡単だが、実際にするのは大変であった。課題として認識しているのは次の通り。

- 1.交通手段がない。駅まで送迎が必要。送迎と船の運航と両方することが困難。自転車という案があったが、年配者は自転車は難しい。この点は根本的なところから検討が必要。
- 2.身近に食事するところが無い。湖岸にも無い。
- 3.例えば、川が荒れてきて、うまく櫓が組めない、という問題が出てきて県に対応してもらった。周囲からのバックアップがないと、観光を継続するのは困難。

コロナ禍で客は0人だが、NPO法人としては税金は毎年7万円が必要。しかしこの7万円を生み出すことが困難なためNPO法人をやめないといけないう状態。

【委員】以前に、国の補助金を利用して試験的に実施した事業において、客に対するアンケート調査（提供した食事等に対する金額価値についての調査）の結果、客を呼び込むには東海方面が良いという結果となった。人を呼び込むことは可能だが、やはり一番のネックは交通手段である。

【委員】公共交通機関の課題についても考えるべきだが、これから先はマイカー利用者の増加が想定されるなかで、対象者の年代や興味によってつなぎ方を検討していくことが大切。

【副委員長】どの地域でも観光では集客に困っている。希望が丘の玄関口は野洲市であり、大変恵まれている。アクセスは野洲駅から遊歩道さえつくったら歩いてもらえるし、そのような設備が必要。

#### ◇「観光」と「まちづくり（生活・暮らし）」について

【委員】アクセス（公共交通）について、1次交通、2次交通、3次交通の3つに分けることができる。

1次交通は市に入ってくる交通。2次交通は市から直接観光地へ運びたいという考えと、生活・暮らしのものがあ、3次交通は各市町が中心にもっているもの（兵主大社や御上神社、家棟川の船のりば、希望が丘等）への交通。滋賀県は真ん中に琵琶湖があるため、2次交通がやっかい。放射線状に広がっているネットワークがない。

中山道、朝鮮人街道、浜街道等、街道沿いのそれぞれの流域にそれぞれ観光地がある。滋賀は琵琶湖があり文化が多すぎて、また、生活というコースが重なっているため2次交通で結ぶことが困難。これからは、3次交通を有効にしながら、いかに2次交通を汎用的に使うかが大切。例えば、2次交通を7～10時と17～21時は通勤・通学・暮らしのために使用し、10～16時は観光や買い物等に併用する。2次交通の終点のバス停を時間帯によって区分けることや、今あるバス停を観光地に近づけてもらう、3次交通は自転車や徒歩で行ってもらう等（徒歩が可能な1.5 km程度のエリアにバス停を設置する等）、市民にも協力してもらって、観光客にも努力してもらうなど、「暮らし」と「観光」を結び付けると、うまく暮らしを守りながら観光を進めることができる。「観光」と「まちづくり」でうまく調整して指針を検討すると、地域の皆様に喜んでもらえるものになる。

先例的には飛騨高山等、観光地と暮らしをつないでやっている所はある。今までは「生活・暮らし」と「観光」は別ジャンルとして都市整備等してきている。今後は「観光」を「まちづくり」「生活・暮らし」に近いところで結び付けてうまく整理するという視点が大切。

#### ◇「観光」と「情報化社会」について

【副委員長】バス会社では100あったものが0になった。何%下がったというレベルではない。何が変わってきたかという情報化社会、コロナ禍のなかでパソコンやスマホを見る機会が大変増加している。これまで旅行会社はPRして集客してきたが、個々で正しい情報取得が可能となった。従来型の観光ではだめと思う。

#### ◇「観光」と「文化・教育」について

【副委員長】中主から野洲に来て、いろんなものがたくさんあることを知った。野洲の文化は大変古く、「観光」＝「文化」だと思う。現存していて、何もないということは無い。この辺を整理する必要がある。

地元のことなのに知らないことが多い。なぜ知らないかという「教育（文化）」だと思う。教育委員会にて歴史文化をもっと力を入れるべき。修学旅行も遠くに行かずに身近な地域に行けばよい。「教育（文化）」から入るべき。市民が「このまちすごいな」と思えたり、質問された時にいろいろ説明できるようにならないといけない。

【事務局】野洲市教育委員会にて発行、学校にて活用している社会科副読本「わたしたちの野洲市」の紹介をした。

#### ◇商業の視点・野洲市の観光の中心について

【委員】今回、野洲市のランドマークである「三上山」のことが出てきていない。現在、コロナ禍だが、御上神社の駐車場は土日はほぼ満車で年齢層も若い。しかし、周辺に飲食や販売所等がないので、来られてもお金が落ちない状態。つまり、商業ベースにはならないということ。三上山の登山者は登られてそのまま帰られる。実際は三上山も県立近江富士花緑公園の年間30万人に近い数字が出てくるのではないかと思っている。やはり中心となっているのは三上山と思っている。

#### ◇観光ブランドの視点について

【委員】ボランティア観光ガイド協会は自主的にハイキングを企画し募集をかける。広報として、JRハイキング、野洲市の広報、過去に来られ方へのDM送付等により、1回あたり30～40人の集客が可能。全く知らない人を集客するための一番のポイントは、「観光のブランド」である。国宝、重要文化財、国指定の史跡や名勝、秘伝を特別に開けてもらう等が呼び込むポイントとなっている。

このように、何も知らない人を呼ぶということを前提にして観光振興指針を考えるのが一つの方策ではないか、ということがボランティア観光ガイド協会の考え。今のやり方もよいが、もう少し泥くさいやり方で検討するのがよい。

#### ◇次回策定委員会に向けて

【委員長】委員から市民への「教育」という提案があり、今後ご検討ください。

また、野洲の代表資産である三上山と琵琶湖との距離が結構あり、それらのある程度の地域で観光的なものを結びつけることは多くの委員から意見があった。

観光について、過去の振り返りと、今後どのような観光に対してどのようにアピールしていくのか、歴史文化や体験型観光（農業を含む）等を検討する。

事務局にお願いしたいことは、どの部分をどう捉えるのか、次回の検討の材料を具体化してほしい。副委員長、いかがでしょうか？

→【副委員長】その部分は、このままでは破綻しそうなので、先生の方で案をつくっていただいて、かいつまんでまとめてください。

(2) 野洲市の観光振興の目指す姿（目的）（案） 及び「野洲市観光振興指針（案）」の骨子の検討について  
— 事務局より資料6・7・8に基づき説明 —

#### ◆市長あいさつ

（別件の会議終了後参加）市長からのあいさつ

**結 果** ・委員の皆様のご議論の結果、次の方向で第2回策定委員会に向けて進める旨、ご意見をいただいた。

- ① （1）の結果と同様、まずは今後の野洲市観光振興指針の策定に向けて、全体の把握をするため、野洲市の観光振興に係る課題を何らかのカテゴリーに分けて整理し直し、野洲市が取り組むべき本当の課題を明確にする。

- ② 「観光振興を通じて目指す姿」の案については、最終目標的なものとして、もう少し近い目標を検討する。
- ③ (1)の結果と同様、本日の各委員からの意見を踏まえて、委員長の協力のもと、事務局にて第2回策定員会での検討材料を準備する。

#### 主な意見・質問

##### ◇課題の再整理と「教育」について

【委員】まずは、現行の課題を整理し直し明確にしてほしい。総合計画にあるように、本当に「野洲市に住みたい」というのであれば、観光からどうアピールするのが重要。愛着や誇りを市民の方に持ってもらうためには、「体験」や副委員長のおっしゃるとおり子どもの「教育」は大変重要と思う。本当に知らない子どもたちが増えていて、教育委員会の力ははずせないと思う。

##### ◇「観光振興を通じて目指す姿」について

【委員】資料6の「(6) 指針の見直しによる「観光振興を通じて目指す姿」(案)」についての3つの案（「1 市民が誇りをもって住んでよかった、住み続けたいと思えるまち」、「2 来訪者が野洲市を訪れたい、いずれは野洲市に住んでみたいと思えるまち」「3 市民も来訪者も健康に、心豊かに成長していけるまち～アフターコロナを見据えて～」）について、私の感覚で言うと少し飛躍し過ぎていると思う。最終的にはつながると思うが、例えば「観光振興を通じてまちづくりの活性化」等、もう少し近い内容で良いと思う。もう少し近いワンステップがあって、この案は、その次に来る最終目標で良いのではないかと思う。

##### ◇広報活動等について

【委員】「ヤスイチ」という言葉を知らなかった。必死になって観光をやっているつもりであったが、勉強不足を感じた。野洲駅に行ったが「ヤスイチ MAP」は現在無かった。

→【事務局】「ヤスイチ MAP」は在庫不足のため、今年度、更新予定。観光物産協会のホームページに掲載していたが、廃業の事業所が載っていたため掲載を止めている。

→【委員】しっかり広報活動をすべき、観光の支援者ももっと勉強しないといけないと思う。

【委員長】本日の議論の内容を事務局で整理し、次回の9月の策定員会の検討材料として具体化して、実質的な議論を進めるという形でよろしいか。

→異議なし。

#### 6. その他 次回 策定委員会について

— 事務局より資料9に基づき説明 —

- ・野洲市観光振興指針策定までの今後の流れ及び9月の策定委員会の日程調整の説明。
- ・本日の会議内容への追加意見について、来週中に個別に商工観光課までご報告を依頼。
- ・次回の9月の会議までに一度、書面等で皆様からご意見をいただく場合がある旨の連絡。

#### 7. 閉会